

モーニングセミナー

**「症例提示 評価と治療解説」**

六地藏総合病院 藤本将志

高齢化社会としての一つの節目とされる平成 37 年（2025 年）まで、あと 7 年となった。平成 30 年度の診療報酬・介護報酬の改定においても、7 年後へ向けた方向性が示されている。そのなかで、医療および介護現場ではリハビリテーションの量よりも質が求められてきている。

関西理学療法学会が目指す方向性は「治せるセラピスト」を養成することであり、その根本はトップダウン評価により正しい問題点を把握することにある。そのためには解剖学、運動学に基づいた動作分析をおこなうことが必要である。問題点を解剖学、運動学で表現し、その関連性（ストーリー）を組み立てることで、どのような治療をするのか明確にすることができるわけである。

私自身、症例を目の前にしたとき、このストーリーの組み立てを必ずおこなっている。そして問題点を 1 点から多くとも 3 点までに絞って治療をおこなっている。量よりも質が求められるこれからの時代では、このような治療展開が必ず必要になってくると考える。

今回、症例を提示し、私の考えるストーリーを解説させていただく。ご聴講下さる皆様はそのストーリーを共有でき、さらには皆様が別の切り口からオリジナルのストーリーを組み立てることができれば、明日からのより質の高いリハビリテーションにつながると考える。